

第 9 章

坂城町の幼・保・小・中学校における 一貫した教育支援のための情報の一元化

I. 研究の背景と目的

II. 研究の内容

III. 研究の成果と課題

IV. 今後に向けて

章末資料

○令和元年度坂城町子育て支援事業の連携及び体制

I. 研究の背景と目的

1. 坂城町教育支援体制の概要

(1) 坂城町の概要

埴科郡坂城町は、長野県北信地区の南部に位置し、人口1万5千人程の町である。中小企業を中心に多数の企業や工場がある工業の町で、稲作の他に果樹栽培の盛んな地域である。

町内には、3つの小学校と1つの中学校がある(表9-1)。各小学校区に3つある町立保育所は各年齢の園児は減少している一方で、0歳児から入園させる家庭が多くなり、保育士が不足している。また、1つの私立幼稚園は、全園児50人余りの小規模園である。

町内には、県立高等学校(普通科・各学年3クラス)もある。



表9-1 坂城町立小・中学校の在籍児童数及び学級数

	A小学校	B小学校	C小学校	D中学校
児童生徒数	308人	177人	216人	410人
学級数(特級外数)	12(3)	7(3)	9(3)	13(3)

* 外国籍児童生徒：小学校18人 中学校14人 日本語指導に加えて、就学相談が必要な児童生徒も在籍する。

(2) 教育委員会(教育文化課)の組織

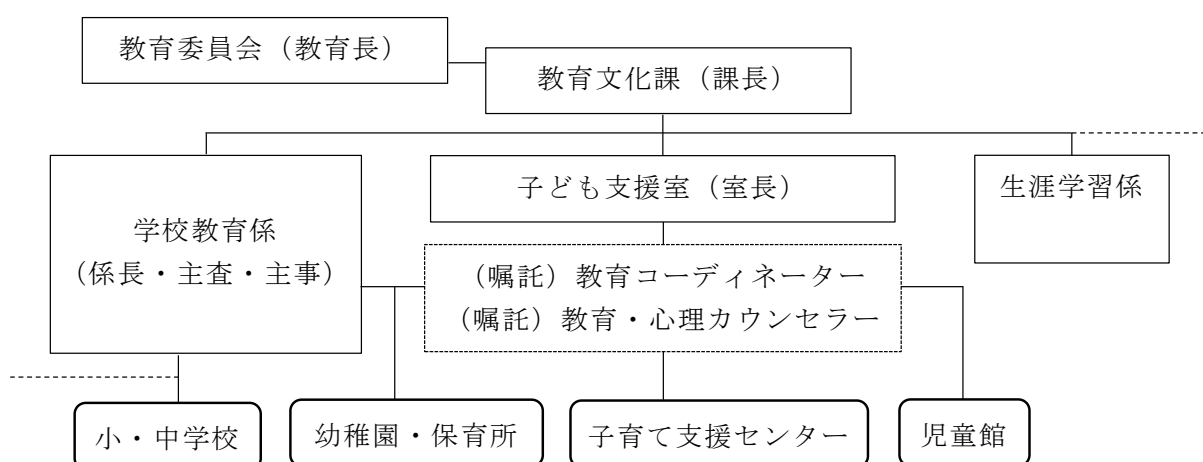


図9-1 坂城町教育委員会の組織

坂城町教育委員会の組織は図9-1のとおりである。

平成30年度より、教育委員会内に「子ども支援室」を置き、保育所の管理・運営、子育て支援を行っている。また、町内保育所内には「子育て支援センター」を設置し、子育て家庭の支援を進めている。

就学相談に関して、以前は就学相談委員会を隣接する千曲市と共同設置をしていた。平成 25 年に単独設置となり、町教育支援委員会が、就学相談、教育支援を行っている。業務の中心は嘱託職員（学校退職者）の教育コーディネーターが担当し、教育・心理カウンセラーが教育相談に当たっている。

（３）子育て支援体制

町では、子どもたちを「障害のある子」と「障害のない子」にわけて支援を行うのではなく、日常生活を観察する中で「気になる子ども」に対して、乳幼児から学齢期まで切れ目のない支援をしていきたいと考えている。表 9－2 に町が行っている子育てに関する事業を示す。

表 9－2 坂城町の子育てに関する事業

該 当 者	事 業 名	事 業 内 容
0 ～ 3 歳	乳 幼 児 健 康 診 断	健康診査：4 か月 1 歳 6 か月 3 歳 健康相談：7 か月 10 か月 1 歳 2 歳
気になる 親 子	た ん ぽ ぽ 教 室	保健師が「気になる親子」を対象に、遊びを通して発達を促進。心理士・言語聴覚士・作業療法士も参加。年間 18 回開催。
年 小 児 気になる子	巡 回 相 談	教育支援委員会の事業の一環として、専門家チーム（保健師・心理士）が早期からの教育相談や就学相談を行うために、年間 2 回保育所・幼稚園を訪問。
年 中 児 親子悉皆	す く す く 相 談	個性や特徴を大切に、幼児が健やかに成長し、もっている力を十分発揮できるために、個に応じた育ちを支援。保健師・担任が健康診断等を踏まえて作成した「基礎調査票（すくすくシート）」を確認した後、運動遊び・リズム遊び等を心理士等が中心になり観察。その活動の様子をもとに、保護者と発達相談。「気になる幼児」には、後日、心理士等とともに保護者・担任とで「応援カード」を作成。就学まで必要に応じて継続して支援計画を更新していく。
年中保護者 全 員	就 学 ガイダンス	参観日の保護者懇談会に合わせ、就学に向けた手続きや大まかな流れを教育委員会担当職員が説明。
年 長 児 全 員	す く す く ラ ン ド	数人程度のグループで、リズム遊びや運動遊びを行い、「すくすく相談」以降の発達をフォローしていく。また、課題を順次高めながらプログラムを進めていく中で、就学に向け、必要な支援を考えていく。年間 7 回実施。心理士・作業療法士等も観察。
年 長 児 該 当 児	教 育 支 援 委 員 会	これまでの早期からの教育相談・支援を受け、就学先決定を行う。また、その後の一貫した支援についても、助言を行う。

年長該当児 保 護 者	移 行 支 援 会 議	保護者、幼稚園及び保育所長・担任、小学校長・支援コーディネーター、教育委員会職員等が集まり、小学校入学へ向けた具体的支援（合理的配慮等）について、具体的に協議する。
----------------	----------------	--

＊ 章末資料「令和元年度 坂城町子育て支援事業の連携及び体制」参照

（４）地域支援ネットワーク

小・中学校に設置された知的障害特別支援学級、及び自閉症・情緒障害特別支援学級に加え、「言語障害通級指導教室」「日本語教室」「中間教室（不登校・集団不適応等の生徒が学習の場として利用）」を活用して、支援を行うことを基本としている。更に、町の関係諸機関、隣接市のLD等通級指導教室からの支援、北信地区・東信地区の県立特別支援学校（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱特別）のセンター的機能も活用している（図９－２）。なお、LD等通級指導教室については、令和２年度から隣接市から教員が出向くサテライト教室の設置が決まっている。

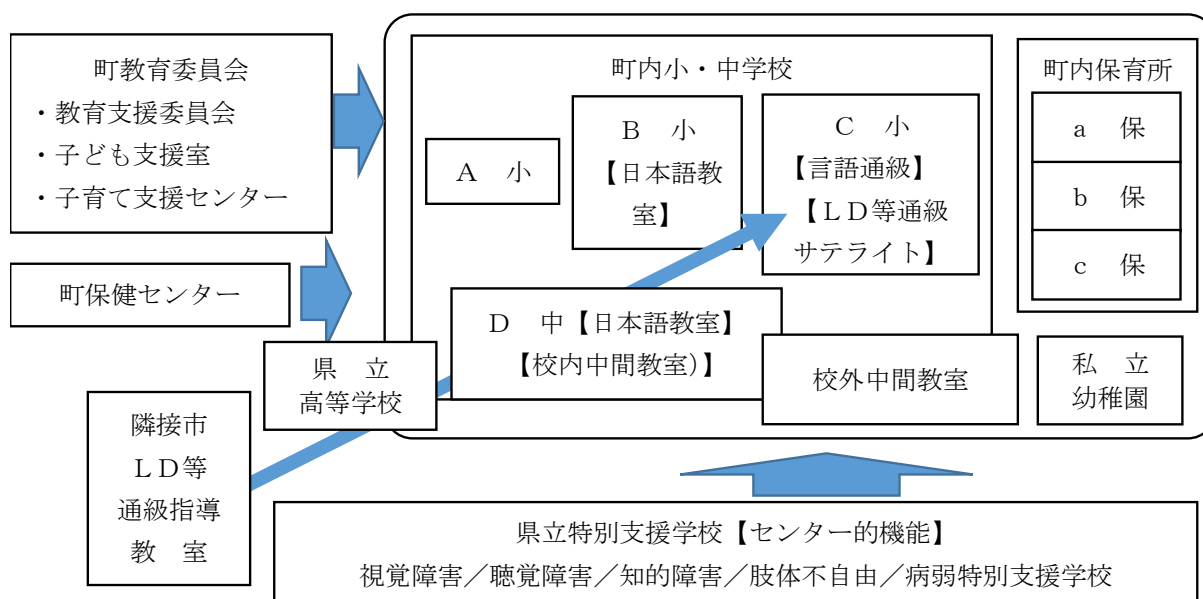


図 9－2 坂城町地域支援ネットワーク

（５）教育支援（就学相談）の現状

平成 30 年度の町教育支援委員会における就学相談の結果は、表 9－3 の通りである。

なお、就学相談を担当する調査員は、特別支援学校の教員に加え、町小・中学校の教員及び保育所職員、県立特別支援学校教員がつとめている。

表 9－3 坂城町教育支援委員会における就学相談結果の内訳

校種	学年	相談 件数	判断 済み	判断結果の内訳									
				通常 の 学級	特別支援学級		特別支援学校				通級指導教室		
					知的	自・情	肢体	知的	視覚	聴覚	言語	LD等	終了
幼保	年長	19	19	3	4	5					2	5	
小学校	1年	1	1			1							
	2年	2	2								2		
	3年	1	1			1							
	4年												
	5年	2	2								1	1	
	6年	8	8			3	1	1				1	
中学校	1年												
	2年												
	3年												
合計		33	33	3	4	10	1	1	0	0	5	7	0

単位：件

* 判断と異なる措置 1件（特別支援学校⇒中学校特別支援学級（知））

令和2年度措置替えの予定

* 集計表外 退級1件（特別支援学級（自・情）⇒通常の学級）

2. 研究の目的

（1）支援情報共有化における現状と課題

坂城町校長会では、以下のような会議内容により、町教育委員会等と協議を行う中で、学校運営を行っている。

【坂城町校長会】

○回数：月1回

○参加者：校長（小学校3校、中学校、県立高等学校）、教育委員会（教育長、教育文化課長、学校教育係長、教育コーディネーター、教育・心理カウンセラー）、子育て支援センター所長、保育所統括園長

○協議内容：気になる子について、町教育委員会からの指示伝達、町学校職員会関係、各校の運営上の課題等

会議の中で、気になる子の情報交換を行い、支援の方向を検討する場では、各校の単独の児童生徒支援にとどまらず、学校をまたぐ兄弟姉妹関係、学校の情報にはない家庭環境や町等での支援の現状、乳幼児期からの支援の経過等の情報が必要となる。

また、町教育支援委員会では、就学判断に当たって、町内小・中学校及び保育所、県立特別支援学校の教職員が、検査・観察等によるアセスメント、資料作成等を行っている。多くのよさもある一方で、負担感も少なくない。

そこで、情報共有にかかわり、次のような課題が出された。

- 各校が共通のフォームで資料を作成することで、情報の共有化をしやすくする。
- 各学校で作成したデータをリンクさせることで、特定項目の検索を可能にする。
- 過去の支援の経過を累積し、支援情報を適切に引き継いでいく。
- 教職員の負担軽減となるよう、就学相談資料、個別の指導計画、移行支援計画等の作成に活用できるようにする。

（２）研究の方向

幼児児童生徒支援について一貫してデータ管理を行う「さあかすプロジェクト」を立ち上げる（図 9－3）。

データの一元化に向けては、まず、各小・中学校の気になる子のデータ管理をするファイルをマク

ロ有効エクセルファイルで作成し、先行的に実施する。その中で、成果と課題を明らかにし、改善を図りながら、町立保育所、私立幼稚園（町内）、県立高等学校（町内）に協力を求め、対象年齢を拡大していく。

シート作成に当たっては、町教育委員会、町校長会の要請に基づき、C 小学校の I C T の専門性の高い教諭が中心的役割を担う。

＊ C 小学校には、I C T 活用を進める教諭がリーダーシップを発揮する時間等を生み出すために、非常勤講師（半日勤務）が県より加配されている（令和元年度単年度加配であるが、令和 2 年度も継続予定）。

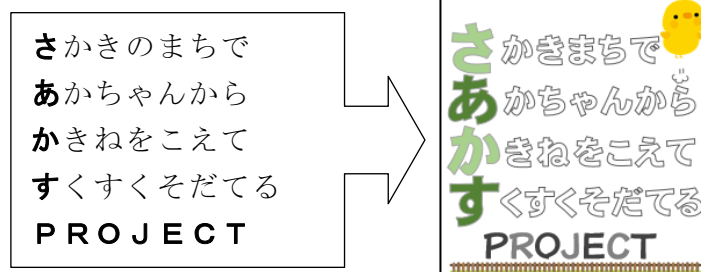


図 9－3 さあかすプロジェクト

Ⅱ．研究の内容

1．研究の手段

（１）エクセルファイルによる情報共有ソフトの開発

各校、園でファイルを作成し、統合することで、全体を管理できるようにする。管理体系は図 9－4 のとおりである。

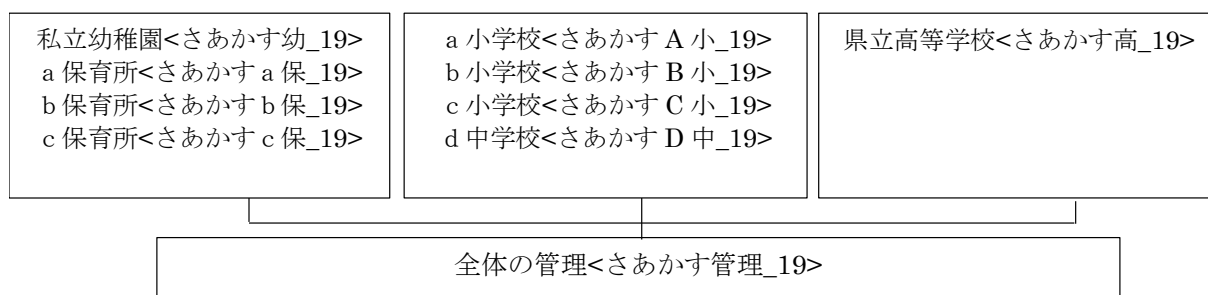


図 9－4 さあかすファイルの管理体系図

本ファイルは校務支援システムのアクセス制限（管理職のみ）がある書庫の中で運用する。各校のさあかすファイルはフォルダ内に置き、管理（親）ファイルは、そのフォルダの外において、管理ファイルが子ファイルデータの回収作業を行う。保存シートにある回収ボタンを押すと、管理（親）ファイルの設定シートの下部にある子ファイル名のファイル全てのファイルを開きデータをコピーした後閉じるといった一連の作業を自動で行う。

各校が表 9－4 の共通の言葉（ドロップダウンリストから選択）を使うことで、ファイル間で連携し、解析ができるようにしていく。ドロップダウンリストは、項目の見直しが必要であり、定期的に検討を行い、更新を行っていく。

表 9－4 さあかすファイルにおけるドロップダウンリスト

性別	小学校区	地区	在籍学校	在籍学年	在籍学級	家庭環境	課題・傾向	支援状況
男	A 小	あ地区	a 保	0 歳児				自情障学級入級
女	B 小	い地区	b 保	1 歳児				知障学級入級
	C							

☆ リストの項目については、「家庭」「現状」「支援」について、3つの項目の選択が可能となっている。1年間の活用の中で項目内容の見直しをすすめ、児童生徒の現状を端的に情報共有できるものへと改善していきたい。

001 ←通し番号

しめい				さかき		たろう		着手		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計		
氏名		坂城 太郎		年少		0日		0日		2日													0日	
性/コード		男		☎1234567		小 1④》自分の世界に入りやすい。乾燥肌アレルギーがあり、毎日、自宅で服薬している。ヨモギ、カビのアレルギーがある。チックがあり、精神的に無理が重なったときに出やすい。 【記入例】小 1④》は、小学校 1 年時 4 月の記録であることを示す。上へ上へと追記をして、記録を蓄積していく。																		
校区		〇〇小		地区																			〇〇	
在籍		〇〇小		小〇																			〇組	
家庭		〇〇〇〇																						
現状		〇〇〇〇																						
支援		〇〇〇〇 〇〇〇																						

図 9－5 管理ファイルの例

【付属機能】

学校保存：保存シートに転記保存する。管理ファイルでデータを回収するための機能。

欄高調整：文字数を基準に、所見欄を最大 2 倍まで拡張する。

全員印刷：入力人数に合わせて、自動で印刷範囲を可変して、入力者全員のデータを印刷する。

学齢並替：学齢がばらばらであっても、これにより学齢順に表示させる。入力者が多数いて、学齢がばらばらであってもこのボタンを押すことで学齢順に表示

される。

番号取得：保存シートに入力されている電話番号一覧を作成する。その電話番号をドロップダウンリストにして、家族コード検索を行う。

現状抽出：現状別（抱える困難さ）により、抽出することが可能となっている。子ファイルでは学校全体の傾向、親ファイルでは町全体の傾向を把握することができる。

コード検索：ドロップダウンリストで指定した家族コード（電話番号）で兄弟関係を検索する。電話番号（主に緊急時連絡先となる母親携帯）により、家族判定をすることにより、兄弟関係を親ファイルから検索できるようにしている。また、管理ファイル上で行うと、高等学校、中学校、小学校、保育所、幼稚園の垣根を越えて、兄弟姉妹を表示する。

例えば、図9-6のように、小・中学校にそれぞれ在籍する同一世帯の兄妹を検索できる。このことにより、それぞれの学校での実態と支援の状況を把握する。

情報を蓄積することで、家族支援の方向を検討する資料とすることを期待している。保育所から高等学校までのデータがそろくと、兄弟姉妹5人のデータが一覧できる家庭もあり、関係諸機関が一堂に会する支援会議等での共通理解と支援情報の共有に活用が期待できる。

001 【妹】

しめい	〇〇〇	△△△	着手	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
氏名	〇〇	△△	小4	3日	0日	3日										6日
性/コード	女	☎		小6④》4年生のときより転校。心身の不調による欠席が多いため、学習の遅れも目立つ。定期的に本人、家庭支援を進めていく必要がある。												
校区	〇〇小	地区	〇区													
在籍	〇〇小	小〇	〇組													
家庭	〇〇〇															
現状	〇〇〇	〇〇〇〇														
支援	〇〇〇															

002 【兄】

しめい	〇〇〇	□□□	着手	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
氏名	〇〇	□□	中1	0日	0日	0日										0日
性/コード	男	☎		中2④》・原級で友人と過ごすことが好きで、学習を頑張っている結果をあげられれば、原級での学習ができると考えており、学習への取り組みは意欲的。 ・集中が続かないので、学習のパターンにメリハリをつけていく必要がある。												
校区	〇〇小	地区	〇区													
在籍	〇〇中	中〇	〇組													
家庭	〇〇〇															
現状	〇〇〇															
支援	〇〇〇															

図9-6 同一世帯兄弟姉妹のコード検索結果例

(2) 運用にあたって

さあかすファイルの運用に当たっては以下の点に留意していく。

- 資料作成に時間をかけず、量が大きくなり過ぎないように、端的な表記を行う。
- プルダウンメニューの「家庭環境」「課題・傾向」「支援状況」の各項目については、1年間の実施を行い、見直しが必要だと考えている。今年度末に大きな見直しを行うとともに、定期的に検討をしていきたい。
- 年度末には、進級・進学に伴うデータ移行が円滑にできるように、システムを構築していく。

(3) 就学相談用「基礎票」等の作成にあたって

更なるデータの一元化を目指して、教育相談にかかわる資料を統合し、適切な引き継ぎができるようにするとともに、業務の効率化を図るためのシステムを検討している。例えば、下記の現行の就学相談「基礎票」等のデータ管理を進めたい。

 基礎票（学校用） No.				
(様式 2 - 1) 記入者（ ） 年 月 日 作成				
ふりがな ①児童生徒 氏 名	男 女 年 月 日生(歳)	学校名 年 組 身長 ()cm	年 組 (担任) 体重 ()kg	
ふりがな ②保護者名	父 母	③(住所) 連絡可能電話番号 TEL ()		
④家族(年齢)	父()母()兄()姉()本人()弟()妹()			
祖父()	同居 ・ 近隣 ・ 遠方・なし		祖父()	同居 ・ 近隣 ・ 遠方 ・なし
祖母()	同居 ・ 近隣 ・ 遠方・なし		祖母()	同居 ・ 近隣 ・ 遠方 ・なし
家庭の状況				
⑤発達 ・健康・通院等の状況 ・入学前の様子（医療機関受診歴・相談歴）				
出生時： 乳児期： 幼児期： すくすく相談：			⑥相談歴(医療機関、相談機関等)	
療育手帳(A1、A2、B1、B2) 年 月 日交付更新時期() 身障手帳()種 ()級 (年 月 日交付)				
⑦学校生活の様子（身辺自立、集団活動、性格、学習理解、表現、運動、製作、興味関心、得意なこと、人間関係他）				

図 9-7 就学相談用「基礎票」の様式

また、作成に当たっては、文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（令和元年 10 月 25 日）にある「不登校児童生徒への効果的な支援について

は、学校及び教育支援センターなどの関係機関を中心として組織的・計画的に実施することが重要であり、また、個々の児童生徒ごとに不登校になったきっかけや継続理由を的確に把握し、その児童生徒に合った支援策を策定することが重要であること」等を踏まえ、「児童生徒理解・支援シート」を活用した組織的・計画的支援等を参考にして検討したい。

2. 研究の経過と今後の予定

本研究における経過と、今後の予定については表 9-5 のとおりである。

表 9-5 研究スケジュール

月	取 組	備 考
3 月・4 月	さあかすプロジェクト準備 1 児童生徒実態共有化の共通シート作成 2 操作性のチェックと操作ガイド作成 町教育委員会、町校長会より、町 ICT 活用委員会委員長（坂城小教諭）に、共通シートの作成を依頼。3 月末に、委員長から試作版 Ver.1 の説明とデモンストレーションを行ってもらう。それを受けて、町校長会からの変更要望を出し、改良を依頼する。要望を受けて、Ver.2 の作成を進める。	4 月 25 日・26 日 第 1 回推進プログラム
5 月	さあかすプロジェクト試作シートでの運用 1 小・中学校での子ファイルの作成 2 データを統合した親ファイルの作成 3 試作シートの修正 Ver.2 が完成し、ファイルを小・中学校に配布し、データの入力を行う。各校の入力状況を確認し、修正を加えた上で、校務支援システム上の共通書庫に保管を完了する。坂城小において子ファイルから親ファイルへの統合を行い、動作を再確認した後、プログラムに再修正を加える。	
6 月	さあかすプロジェクト始動 1 修正シートを使つての小・中学校での子ファイル作成と親ファイル作成 2 保育所・幼稚園へのシート配布 Ver.3 に移行をし、小・中学校で入力を進める。活用に支障がないことから、保育所、幼稚園にも同ファイルデータを配布し、入力の準備を始めてもらう。	6 月 7 日 特総研研究員の坂城町訪問と助言
7 月	3 幼・保での子ファイル作成 4 小・中学校での親ファイルの活用 作成したデータが、「町子育て支援を考える会」の資料や放課後児童クラブの児童支援に活用できないかという要望が出される。また、Ver.3 に対する中間評価を行い、今後の方向を	

	検討する。	
8月	5 ファイルの課題点の修正 ○ 特総研中間報告書の作成	8月29日・30日 第2回推進プログラム
9月	さあかすプロジェクト本格始動 1 幼保小中での子ファイル作成と親ファイル作成 2 統合ファイルの分析	
10月	3 幼保小中高での連携の検討 4 就学相談での活用	(中間評価ヒアリング)
11月	5 高等学校での活用法の検討 ○ 特総研報告書の作成	11月13日 特総研研究員による坂城町訪問と助言
12月	さあかすプロジェクトの評価 1 データー一元化の有効性 2 教育支援委員会資料との互換性 就学相談用「基礎票」等の試作開始 就学判断シート、個別引継ぎシートと連動するプログラムの作成を開始する。 ＊ 0歳から高等学校卒業までの追跡支援を目的に作成、シートをリンクさせることで、作成の効率化も図る。	12月19日・20日 第3回推進プログラム ＊報告書原稿目標
1月	○ 特総研最終報告書の作成 さあかすのバージョンアップ 不具合の修正とともに、来年度に向けて、年度移行が可能となるように、プログラムを修正する。 就学相談用「基礎票」等のデモ版の検討 デモ版にて、修正点を検討し、試作版を作成する。	(評価委員会)
2月	本年度のさあかすプロジェクトのまとめ 1 成果と課題の検討 2 今後の計画 就学相談用「基礎票」等の試作版の検討 修正された試作版を検討し、運用に向けて準備をする。	2月6日 研究成果報告書締切
3月	次年度に向けてのさあかすプロジェクトの準備 就学相談用「基礎票」等の試作版でのテスト運用 「さあかす 19」から「さあかす 20」へのデータ移行	3月26日 修正版締切 (評価委員会)
4月	教職員へのシステムの周知と「さあかす 20」運用開始 ・ システムの入力方法の研修 ・ 昨年度の支援情報の確認と支援会議の計画 就学相談用「基礎票」等の本格運用に向けた準備 (予定)	

Ⅲ. 研究の成果と課題

1 中学校に町内 3 小学校児童がすべて進学をすること、各小学校にはそれぞれの地域の保育所園児が入学することから、小 1 プロブレムや中 1 ギャップ等、不適應への早期対応のため、必要感のある取組となっている。また、本町は各児童生徒の顔がわかり、家庭状況がとらえやすい規模であることから、情報の共有と蓄積により、よりよい支援が継続していくことを願っている。

また、システムの予算化には経費がさけないため、エクセルを教員の手によりプログラムすることで、いち早く運用にこぎつけることができている。

1. 情報管理面での成果と課題

本取組における情報管理面での成果については以下のとおりである。

- 取組開始当初のファイルへの入力は大変であったが、月々の入力は負担感が少なくなってきたこと
- 共通のフォームとなったことで、入力にかかわる労力が軽減されるとともに、各校提出の資料が読みやすくなったこと
- 各学校等が、ドロップダウンメニューから、共通の言葉で状況を選択することにより、気になる子の分類の視点が明確になり、的確に実態把握ができるようになったこと。また、協議の際には、課題となる事項がとらえやすくなること
- 校務支援システム上の管理者権限のある書庫で保管するため、情報管理が適切に行えるようになったとともに、各校、町教育委員会でも常時閲覧が可能になったこと。そのことにより、個別対応が必要になったとき、情報を確認できること
- 家庭環境等の支援が必要な場合、小・中学校、保育所をまたいだ兄弟姉妹関係の検索が有効に働くこと

一方で、課題と考えられることは以下の点である。

- 初期の入力にかなりの労力を要すること
- 紙ベースで印刷配布したとき、資料枚数が多くなってしまうこと
- 町立であっても、保育所には校務支援システムの導入がされておらず、電子媒体を使った資料のやり取りになってしまうこと。また、入力にあたっては、一時的に業務が増えることになってしまうこと

2. 就学相談面の成果と課題

本取組の就学相談面における成果については以下のとおりである。

- 保育所の支援情報がいち早く町教育委員会、入学先小学校に入り、円滑に教育相談・就学判断が進むとともに、小学校での受け入れ準備が進められること
- 小学校の支援情報を継続的に中学校に伝えることで、支援の継続が図れること
- 高等学校等への進学希望を関係諸機関が把握し、必要に応じて情報提供や支援ができること

- 地元高等学校へ進学した生徒の状況が把握でき、必要に応じ町企業への就職等の支援ができること
- 一方で今後課題となっていくと考えられることは、
- 0歳から18歳までの支援を具体的に進められるよう、更に取り組を進めること
- 地元企業とのつながりを強めるため、坂城勤労者福祉センター、テクノハート坂城協同組合等との連携を図っていくことが挙げられる。

3. 来年度の活用に向けて

4月には、年度が変わることから、「さあかす_19」から「さあかす_20」へのバージョンアップの必要がある。1年間の活用を通して分かった不具合を修正するとともに、次年度へのデータ移行を可能とするように、プログラムの修正を行った。

2月から新バージョンでの入力を開始して使い勝手を確認するとともに、3月には年度移行のためのデータ移行を行う予定である。

バージョンアップの主な内容は、以下のとおりである。

- 並び替えの際のデータのずれについて、バグを修正する。
- 転出した児童生徒を一覧表から削除する転出処理のボタンをつける。
- 印刷データでは、最近の支援情報のみが出力されるように、行数制限をかける。
- 保育所、高等学校についても、最寄りの小学校に月末データを届けることで、校務支援システムにアップできるようにする。
- 学年を次の学年に、進学した小学校、中学校、高等学校へ移行できるように、年度更新ボタンを追加する。ただし、クラス替えに伴う学級の変更については、手入力により修正が必要となる。
- リセットのための全消去ボタンを追加する（通常は不要）。

IV. 今後に向けて

取組を継続していくために、幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校のすべての教職員に理解と協力を求めていく必要がある。このシステムにより、児童生徒の一貫した支援が促進されること、書類作成の負担が将来にわたって軽減されること等を丁寧に説明していきたい。それと同時に、運用を軌道に乗せ、成果を出していくことが求められる。児童生徒への適切な支援、保護者の安心、教職員の負担軽減、地域の活性化等について、成果を検証するとともに、取組の改善を図っていきたい。

更に、期待される情報の一元化にかかわる取組は以下のとおりである。

- 町の関係会議の資料として活用し、資料作成の労力を軽減するとともに、情報の適正な管理を前提に、放課後児童クラブ等での支援情報としても活用したい。
- ドロップダウンメニュー検索により集約した傾向を学校ごと、町全体で把握できる自動計算プログラムを開発したい。
- 入力したデータが、個別の指導計画や就学相談資料、移行支援計画等に反映され、入力の重複を避けるシステムを開発したい。

(令和元年度地域実践研究員 宮坂 正)

章末資料：令和元年度 坂城町子育て支援事業の連携及び体制

令和元年度 坂城町子育て支援事業の連携及び体制

